

古本説話集のかなづかい

山内洋一郎

- 一、はじめに
 - 二、ハ行転呼音の表記
 - 三、ア・フ行音の表記
 - 四、オ・ヲの表記
 - 五、結び
- 一、はじめに

梅沢本『古本説話集』は四筆により書写せられている。仮名遣が第一義的には書写者に帰せられるものである以上、本書の仮名遣も四筆を前提として考察されねばならない。教種の転写本の存在する資料においては、その比較により原本の仮名遣にまで溯りうるかもしれないが、一本のみの本書の場合は、四筆のうち誰の筆が原本の姿を残しているかという問題となり、その考定は困難が予想される。従って

今はそこまで溯及することをせず、梅沢本四筆における仮名遣の実態を把握し、そこに見られる異同についてどう解釈するか、本文考定にどうからませるか、を目標とすることにした。

本書の書写を為氏・阿仏尼・為相三名に擬す貼付の極めの説の当否は暫く措くとしても、藤原定家より後代のものであることは動かさず、所謂定家仮名遣との関連如何は、興味あることからである。重要な観点といつてよいであろう。

調査の対象より、本文の異筆による書入れ、訂正部分、踊り字部分を除く。漢字表記も除かれるので、総索引より得られる数値と異なることが多い。引例の所在は、『古本説話集総索引』のページ行である。
へ1) 山内『古本説話集の平仮名字体』(『鎌倉時代語研究』第二輯、昭和五四・三)

代語研究 第二輯、昭和五四・三)

二 八行転呼音の表記

語中語尾のハヒフヘホ全てに転呼音現象と認められる表記がある。八行仮名で記された正用は多種多量なので、その全例を報告することができない。誤用例は全てとり上げ、四筆(A¹⁶⁶ B¹⁶⁶ C¹⁶⁶ D¹⁶⁶)に分ける。各筆に共通する事例は別に記述することが多い。括弧内に所在ページ・行の他に、四筆全体に見える正用数を分母に誤用仮名表記を分子にした数値を添えて、参考とする。

1 は——わ(1)

- A さつわ(幸 317%)
 - C けり小(俄 152.9%) むわ(母 172.3%)
むわ(黒子 172.5%)
 - D うわ(傍 253.1%) じわ(依 236.8%)
わ(童 266.9%) じわ(繩 288.4%)
くわ(加 274.8%)
- 右の語の中で『仮名文字遣』(『國語学大系』による。)に
さいむい 幸 福 にむかなり 卒余 頌 俄
も、 母 嬢 たはら 依
わらし 童 なむ 繩 索

とある。梅沢本で「ハ、ヒ、フ、ヘ」17例に対し「むわ」が一例のみあるのは、例外と見て、表記意識の緩みと解してよいと思われる。「わらし」も同様であろう。では、梅沢本中の唯一例が「わ、む」となっている「けりしく、むわくろ」に「わらし」「むわ」「くわう」はどうかであろうか。語中・語尾の「は(むハ)」表記例は「あらひ(159)」「あし(159)」「しき(363)」を始め、助詞を除いても約460も存し、「わ」は右の僅か10例なのである。特に「わ」表記を採ったものと思われぬ。

2 ひ——い(ぬ)

- A おひ(生 15.5%) ひい(曾孫 46.5%)
- B あひ(失 82.2%) さひ(い) (93.8%)
な、いく(覆 99.7%)
- C ちひ(覆 126.8%) わあ、い(麻柱 128.4%)
すひ(交 129.8%) くわ(食 131.1%)
ゆひ(結 146.1%) むわ(追 147.3%)
ひ(坦 170.2%) ゆい(結 183.9%)
い(争 132.7%)
- D むい(縫 207.1%) むい(縫 207.1%)
むい(灰 21.8%) ぬく(福納 25.3%)

右の語の中で『仮名文字遣』に出るものがある。

くひ物^あゑ^て 食 けひ 灰

うしなひて 失^い喪 になひて 荷^い擔

をほひ 蓋

右の他に「ひ」表記のない語がある。

「つひに」 後^れ判^小 (D 204 4 207 6 3%)

「そこひ」 そ^こ判^小 (D 224 1 225 1 7 226 3 4%)

「ちひさし」 ち^ひ判^小 (A 26 7) ち^ひ判^小 (B 22 10)

「ちひさやか」 ち^ひ判^小 (C 31 3) ち^ひ判^小 (D 22 9)

『仮名文字遣』に次のようになり

そこゐ 感^い井^い袖^い中^いサ つゐに 遊^い終^い竟^いとい

ちひさし 小 少 (下官集^いつゐに)

前二者は今日から見て誤っている表記により『假

名文字遣』に一致し、後者はそれと抵牾する表記を

梅沢本四筆が用いている。八行勅調連用形の「ひ

に」あたひ、あぢはひ、等を加えて、600余例が「

ひ」で記されている中の極少数の遠例である。「つ

ひ」は「ひ」そひ、ちひさし、「ちひさやか」は定

家仮名遣と必ずしも直接には結びつかない慣用で、

他はやはり表記のゆるみと見てよいであろう。

3 ふーう

B をろう (70.1%) けいゆり (宣^い71.3%)

を引れく (倒 88.9%) 物系判 (震 107.5.8%)

C を引れて (倒 152.5%) く引 (食 167.7%)

を引れく (倒 181.2) あひり引 (扱 184.10%)

D をうさき (横鼻禪 21.6%) す引 (吸 23.6%)

か引ち (河内 22.2 221.10%)

けいじ (集 26.4%) くわ引 (加 274.8%)

この中で『仮名文字遣』に「ふ」形で出るものに

かけろふ 蜻蛉 灯煙 胡盤 源氏物語在え

たふる 倒 儂 卧 たふる 驚^い牛^い馬^いの^い死^い

があり、「う」形に次例がある。

たうさき 積鼻禪 龍のかうち 龍河内在^い野

「河内」は「内」に引かれた面が強いのであろう。

「倒る」はまず八行転呼に添ってタウルとなり、次

に「転」などの長音化の方向を採らず、音節保存の

方へと逆行してゆく。「たをれもの 驚」(仮名文

字遣)はあるが、梅沢本には「を」表記がない。(「

扇ぐ」茶」などの変遷と併行するであろうが、梅

沢本ではこれらの語に「う」を「表記がない。)

「単」の語群は「う」がる、しさ、し、し、ぶ、な

どが梅沢本にあり、A 2・B 2・C 6・D 13、計 23

例が全て「う」である。

たぬとし 貴尊 (仮名文字遣)

数多い用例が四筆とものに「たう」とあることは、この表記の固定していることを思わせる。

八行動詞活用語尾を除けば、語中語尾の「ふ」は数が限られるので、相対的に「ぬ」の比重が高まり、45%ほどの違例となる。しかし、八行動詞での違例は3%ほどにすぎない。従って「ぬ」の類以外は表記のゆるみとして把握してよいかと思われ、^{〔雑〕}「禪」^{〔河内〕}「倒る」が「う」を意識的に撰んだ表記かどうかは未詳である。

字音語入声音「ト」は全て「ト」う」と表記せられてゐる。

合 ^{〔合〕}「ぬりひをけふ(不合 B 107.1) 他4例

甲 ^{〔甲〕}「光乃(う)のや(に)(巻甲 C 124.2)

兼 ^{〔兼〕}「か(う)佛(迦葉 C 136.3) (D 245.8)

雑 ^{〔雑〕}「体(う)名(ま)木(と)山(雑色男 B 101.3)

法 ^{〔法〕}「序引(D 220.9) 和(引) (B 82.4) 等(安)法(2)

右のうち「仮名文字遣」に載るのは次のごとくである。「う」となっている。

かめのこう(巻甲) ほうもん(法文) ますほう(御修法) かしほ(御修法)

4. 「へ」「え」「ゑ

A 扱(さ) (助 51.9%) 扱(扱) (扱 41.5%)

B 着(き) (着 95.5%) 心(こ) (心 78.9%)

C う(う) (上 127.3%) 128.1% 134.6% 165.1% 5%

D 以(い) (以 20.6%) 以(以) (会 24.1%)

「上」はA(3例)、B(3例)は「うへ」のみで、C筆が「うへ」6例に対し4例、D筆が7例に対し1例が「うゑ」である。筆による違いが注意される。

「下官集」に次のごとくであり、
不堪(た)へす やへさくら いへ家
うへにをく あすさへ(緒事)へけふさへ
「仮名文字遣」にも加えられるものがある。

心(こ)へ 心緒 意見(日本紀) たへて 湛水也
四筆を通じて、家(い)へは全て「いゑ」とである。仮名遣の書に「いゑ」とするものがないにも拘わらず、

A 1・B 3・C 1・D 8、計13例が同じである。
これ(序引)のうへ(い)へ(い) (B 60.5)

助詞「へ」「さへ」を除く語中語尾の「へ」25例のうち違例は25、85%にすぎないが、その中に「いゑ」「うゑ」の多いことは、習慣の存したことを思わせる。

「おほほ」を

この条では述べ方を変えてみたい。各筆に共通して「を」に大きく傾く語が存するからである。

「いとほし」の例 (B 1147)

Bに「秋」1、Cに「木」1(行頭)、「を」2、「秋」3、

Dに「秋」6、計13例。「ほ」表記なし。

「とほし」とほさかる」の例 (B 954)

Bに「秋」1、Cに「を」1、「秋」4、計6。

但し、「とほし」が「れま」(D 889)が一例ある。

「なほ(猶)」の例 (A 101)

A 2、B 3、C 3、D 7、計15例全て、「秋」。

「なほ(直)」の例 (季直 A 478、485)

「例考(直すC 497)」の例 (直衣 D 281)

定家仮名遣では平声「お」、上声「を」の別があり、

「遠し」は上上上、「猶」は平上、「直し」は平上

平であるから、「秋」でよいが、「直衣」は平平平

で紙触する。「いとほし」は「いとほし」糸借兼借

(仮名文字遣)に見ることく、「惜し」へ「をし」淨弁本

拾遺集)と結びつけられる。梅沢本では「お」を用い

ない。「惜し」も同様である。

と秋し 遠 遠 直衣 (仮名文字遣)

「とほす」の例 (C 498)

「おほほる」の例 (D 242)

「おほふ」の例 (B 997)を引いて (C 1268)

「おほみき」の例 (A 259)

右四語は「ほ」表記のない単発的例である。「通

す」は名義抄で平平上、「廢る」は平平上平となつて

いる。梅沢本「と例し」は定家仮名遣と一致しない。

「おほし」(大多御等)は2例が「ほ」で記され、

右が例外である。それは、平声の語頭音が「を」で記

されるという遠例が踊り字により次音節に及んだの

である。

「護法」の例 (C 1471)他に3例。(けふ) (D 2401)

「修法」の例 (D 2399)

「ごをう」は他資料にも見え、「ごう」も室町時

代の資料に見る形である。残るのは次の二例である。

「かほ」の例 (A 579)

「はつほ」の例 (C 253)

「ほ」のみ用いられる語は「庵」1、寝つ3、氷1、

郡6、環る3、朝・遠毫3、融2、句4、まほし2

などで多くはない。従つて、「おほし」の群以外で

は、「を」表記の方が多し(55%)。「お」は1例である。

右にアクセントとの対応を調べてみたが、その関係

は薄く、「を」表記の率の高さが注意される。

三 ア・ワ行音の表記

6 わーは

語中語尾の「わ」は全て「む六」で記されている。

「くつわ(轡)」 くつわし (D 194 9)

「ことわり(理)」 おとまり (A 24 3) ことわり

(A 37 3) ことわり (B 83 4 83 9)

「ことわる」 ことわり (D 29 5)

「かわく(乾)」 かひかせれ (C 185 7)

C 4・D 2、計6例全て「七・ハ」表記。

「さわがし(騒)」 さわがしかり (C 144 1)

「さわぐ」 ちしきあひ (D 234 9)

形容詞・動詞併せて、C 8・D 6、計14例全て

「七・ハ」で記される。

右の各語が四筆にそれぞれ見えるのではないが、「わ」表記がないので、原則として語中語尾に「わ」を用いない習慣であつたといえるであらう。「仮名文字遣」には「ことわり 理 處断」のみ載っているが、他も当時通行の表記法であつたことは確かである。ハ行転呼音の先行により生じたものである。

7 いーゝゝ

音便を含む語に「さいつごろ(先頃) D 234」

さいはひ人(幸) A 31 7 64 7 さいぢ(築地) B

87 5 さいいで(序) A 14 10 B 86 9 さいいて C 130

1 この7例に、接頭辞「かい」の4例(B 75 9

108 5 C 141 7 147 4 が「い」で記され、

「おほいなり」 おほいなり (C 127 9)

「かいほる」 かいほる (C 125 9)

「ついたち」 ついたち (B 112 6)

右が「ぬ・ひ」表記である。三例とも行の変わり目に

位置することが注目される。自然な表記と見えない。

「おい(老)」 おい (B 78 3) をい (80 8)

まいりにいぬ (B 109 4) やいれ (D 234 1)

「くい(悔)」 くい (D 29 8) くい (28 6)

「むくい(報)」 むくい (D 199 7)

右は十行動詞関係の動詞・名詞である。名詞「老」「報」に一例ずつ「い」表記があるが、他は「ひ」であるところを見ると、活用語尾に「い」を持つ形にある抵抗を感じることがあるのであらう。「くひて悔」(仮名文字遣)とある。

字音語にも「ひ」表記が3例ある。

「愛」 あい (D 190 9) 愛敬 86 1

「戒」 かい (戒師 B 109 7) 戒 15 5例

「礼」 れい (無礼 D 210) れい盤 29 9

「い」の字音語は「海階蓋齋西歳
 暫對第帝大進体泥颯内屏
 瓶来社裁」など延べ74語あって、3例に
 「ひ」とあるのであるが、これが和語に紛れるほど
 同化したためと見られる。「變す」は
 あひして「變」（仮名文字遣）
 と誤っている。

8 おぬ——い

「ぬ」の音節を持つ語は多くない。まず「居る」
 「ゝぬる」「居る」の動詞に「雲居」「出居」「長
 居」「居丈」「田舎」を加えた59例の中で、「い」
 表記は次の6例である。

- C おぬりいり (482) 思ひていまる (485)
- くひいり (1706)
- D いぬりいり (483) こうまいぢい (483)

かていり (278) 「居る」の意かどうかは考ふべきである。

他の語彙に「飯」「成亥」「外居」「紅」「綾あや」「あや」
 並、及び字音語「小院」「檢非違使」等がある。
 これらに違例はないが、「い」で書かれる語が二種
 見出される。

- いる(案) いてまく (A 563) いてまく (B 144)
- いてゆい (D 485) け 初く (D 271)

「まぬらす」 しうひいりせ勢 (A 97)
 「まぬる」 子いまいりま (A 135)
 「参る」「まぬらす」は複合の名詞、動詞を含めて多
 量に持つているが(全14例)、全て「い」である。強く
 固定した表記形である。「率る」も一例の例外はあ
 るものの、「いる」とされていたようである。
 この二語を除いて、他は表記のゆるみと見てよい
 であろう。

9 う——ふ

語中語尾の「う」は音便を中心とした後出形であ
 る。まず形容詞連用形ウ音便を見るに「おかいハ」
 (B 876) など25例が「う」で、例外は一つである。

あいりうおかいハ (B 7810)

B筆に形容詞ウ音便は15例も多く存している中で、
 右の例が「ふ」表記を採らねばならない理由は見出せ
 ない。ハ行四段動詞連用形ウ音便は2例とも「ふ」で、
 ういりうにもぬをぬへて (B 1099)

くいりい (C 1705)

前例は「うれしう」との変字意識が働いて、字形
 の密な「ぬ」を選ばせたものか。終止形表記の影響は
 いうまでもない。右以外の和語としては、

かう かう かう かうばし かうべい かうらうじ

て きうち けうらなり つかうまつる どう
と たたうがみ

などがあり、「あづまうど」「あほうの郡」もある。
これらに「ふ」表記は見られないが、次例は「けうら
なり」の類義語と見れば、「てうらなり」を正しい
とすべきであろう。

てぬらひふ月も (B 67 4)

数多い字音語「う」の中で次の三語のみ「ふ」
となつてゐる。

「優」 いぬり (A 10 4) 他に A 4 例とも「ふぬ」
「希有」 けい乃 (D 27 5)

「けう」の「は」筆に 3 例ある。

「興」 けいやさを (B 104 5)

いずれも和語の中にとけこんだ漢語臭の薄い語であ
る。

10 え——ゑへ

「え」を「ゑ」とするのは和語に一例で、

「えもいはず」「ゑしいとす (C 166 1) 1/4

副詞「え」「えせ」「えだ」「えのき」「える」な
とは「え」である。字音語には

「影」 かげいさう (影像 C 136 1)

「栄」 けいいさう (栄華 A 10 2)

「縁」 縁んり加くり (縁か福地 D 27 1)

この三煙がある。後例は実体未詳の語である。「縁」
自体は「じん」 45 1 等と 5 例が「えん」なので、
これと仮名の異なるのが気がかりなのである。

「栄」の字音については、「ゑ」を良しとする馬判
和夫博士の指摘がある。

ヤ行下二段動詞連用形に「へ」表記がまじる。

「栄え」 さうて (A 46 3 C 166 3 3/6)

「絶え」 絶えて (C 149 4 1/4)

梅沢本では他に

得え 覚え 消え 聞こえ 越え 淨え 冷え

見え 燃え

などであるのは全て「え」であるので、右の 3 例は
僅少の表記のゆるみである。これらの語がゆるみを

生じたときに「へ」を採るのは、「さかへ」^{さかへ}「榮富」
「さかえゆく」^{さかへ}「榮行」(仮名文字遣)に伺える。

11 ゑ——えへ

和語の「こゑ」11 例、「すゑ」6 例に違例はないが、
「えへ」となるものがある。

「すはゑ(楚)」 すいん (C 146 1 146 2 3/6)

「つゑ(杖)」 つじり (類杖 A 55 1)

「ゆゑ(故)」 ゆい (A 24 10 35 10 C 183 10)

ゆへ (D 204 6)

右の「楚」は「すはる」とする説を採った。

『下官集』には「こゑ すゑ」と共に

ことのゆへ ゆへ つゑ

とあり、「つゑ」「ゆえ」はこれに一致しない。

ワ行下二段動詞運用形は次の通りである。

「うゑ(植)」「うへ(こ)うして (D 253 7 5%)

「すゑ(掘)」「すゑて (D 192 7 14) 9 例、ゑ」

「植へ」は「草木をうへをく」(下官集)に添って

いて、「掘ゑ」も「すゑしと思ふ」(同)にも逆の意

味で添っているといえる。

字音語の「大会」(左衛門)等に違例は存しない。

△1▽『国語学』80集、新刊紹介、昭和45。

四 オ・ヲの表記

「お」「を」に関する表記は、定家仮名遣において上声「を」、平声「お」のアクセント別の基準を立てたことと関連して、複雑な様相を呈している。しかし、梅沢本では、既に見てきたごとく、定家仮名遣に近い面を持ちながら、頻度が高い語で一致しないもの(斬と、いとをし、写と)もあつた。

まず字体「枚」について述べておきたい。定家書

本で「枚」に「お」を中和する用法のあることが指摘されている。梅沢本の「枚」は、字体としては詳説すべき点があるが、

詠頭	を	21	詠中	を	24	助詞	を	257
枚	15	詠尾	枚	37	枚	363		

となつており、詠體や筆の種類による差と共に筆の運びにおける位置による違いが看取でき、子細に文に当たっても、中和の現象と認むべきものはなさうである。

「お」「を」を詠頭に持つ語は多量なので、例示せず一覽表とした。「を」を詠中詠尾に持つ語4種を付載し、表より除いた語形未確定の語も示した。これらに「ほ」の転呼音表記を加えれば、全例となる。

語頭音の歴史的仮名遣「お」「を」により語を分け、その上声か平声か(定家仮名遣の「を」「お」に対応)によつて細分して、四表とした。更に、a定家仮名遣の形で全例が書かれている。b定家仮名遣の方が多い。c定家仮名遣に一致不一致同数か不一致が多い。d不一致形のみにこの四段階を置いた。アクセントの判定は『類聚名義抄』、古今集声点本、淨弁本『拾遺集』などによる。定家『下官集』、行阿『仮名文字遣』を参照した。

2

おぼつか 思す 思しめす おぼほゆ おほゆ おほえ おほか 凡よそ 覆ほる 狼 買戻す 仰せ 大い 大い 生ふ 鬼 劣る 大人 愛宕 興山 翁	語													
	A	B	C	D										
5	5	1	8	1	6	11	1	3	2	4				
1	7		11	1	2	4	1		1	1	1			
1	4		7	2	13	2	2	8	1	2				
1	7	4	9	1	14	1	6	1		3				

① おー平ーお

c

驚く 落つ 起り 起す 起く 下す 思ふ おぼし 多し おほす おほし 同じ おとど 落す 怖し 老ゆ 面白し 面影 お前 おぼろけ おぼろ	語													
A	B	C	D											
2		1	5	24	2	3	14	1	1	4				
1			6	1	3	9	9	1	5	3			1	1
2	3	1	3	2	6	12	7	16	6	3	3	2	1	1
1	1	1	1	21	1	9	7	10	14	1	2		1	
3	8	1	4	2	1	1	6	1	2	1				

a

因緒	③	
1	1	をー上ーを

b

音行 か	怠る	置く	己各々	怖ぶ	遅し	押し	盡す	後る	旋つ	②	
1	1	2								おー上ーを	
5	2	6			6	1	3				
1	1	2	3		1	2	1	2			
3	4	6		1	1		1	1			
1	8	1	3								
1	5	3	12	2		1		3			

c

おや おもの おもて	語								
A	B	C	D						
1	3	3	2	1	2				
1	5	3	1	3					
1	3	1							
1	2								

d

教ふ	犯す
1	
1	
1	
1	2

c

おほけ おほふ	おろか	堂し	追ひ	訪れ	送る	おれ	己れ	自ら
			1	1			1	1
		2	1		1			
	1	1	1				1	1
	1	1	2			1	6	2
1	2	1					1	2
					1		10	5

d

大御酒	覆ふ	租父	下る	弟
1		1	1	
	1			1
	1			
				7

小野宮	をどる	語	筆
		おを	A
		おを	B
		おを	C
2	1	おを	D

④ をー平ーお

	c	b	a
口惜し	幼なし	桶	拜む
2	1	2	4
2	1	2	4
1	1	1	4
1	1	1	5
1	1	3	9
1	1	17	2
1	4	13	6

青	魚	や
1	1	1
1	1	2
1	1	4
1	1	5

終はり	をのこ	居り	をかし
		1	4
		1	7
		1	1
3	2	1	1

折敷	長	折れ	折る	折る	折	尾張	惜しむ			
								1	3	1
								1	4	1
								1	2	3
1	1	1	1	4	1	1				

未詳

村々々々々々 (D 227 10)
 々々々々々々 (D 250 1)
 々々々々々々 (D 220 2)
 々々々々々々 (D 254 8)

右の表を、少数の欄に筆ををかす通覧してみる
 と、次のようなことが言えそうである。

① 「おー平ーお」のa,bは多様多量で安定度が高い。中でも「おほー」「おぼー」の語群は、7例の中に次の3例と「覆ふ」「大御酒」とが異なるのみである。

「覆ふ」 (D 215 10) 「大御酒」 (A 25 9)
 「おほー」 (B 99 7) 「おぼー」 (D 249 5)
 「おほー」 (D 25 10) 「おぼー」 (D 249 5)

② ③は歴史的仮名遣と定家仮名遣の一致したもので、④は不一致のものである。後者で、特に④でc,dの比重が高い。「を」と「こ」を除けば、この「をー平ーお」、即ち「を」を語頭に持つ語で、平声故に「お」で表記しようとする定家仮名遣の傾向に添う語は、梅沢本では弱い状況にあるのは興味深い。「拜む」(2-16)、「折る」(1-13)は極端に定家仮名遣に反する傾向を、一筆ならず持っている。

ここで、各筆が歴史的仮名遣と定家仮名遣とのどの程度に一致するかを、①②③④の延べ語数について算出してみると次のごとくである。

	筆	A	B	C	D	全巻
歴史的仮名遣との一致率		72.6%	71.4	70.3	60.7	67.5
定家仮名遣との一致率		77.4	67.7	83.6	64.4	72.6

どちらかといえは、定家仮名遣に近い表記法を採っているという数値が出たのであるが、30%前後の

違例が双方にあるといふことは、どちらの仮名遣でもないといえよう。歴史的仮名遣は後世から見ても確した体系であつて、その行われたであろう平安時代も後期に下つては、語によつて自然に特定の表記法を採るものが出てくる。馬淵和夫博士の「平安かなづかい」が存在した。この慣習的表記法は定家仮名遣にも影響し、それに採られなかつたものもまた鎌倉時代に継承されていゝと思われる。この点を梅沢本の表記でも考慮されねばならないであろう。

へ1 小松英雄「藤原定家の文字づかい」を「お」の中和を中心として、「言語生活」212、194より

へ2 秋永一「古今和歌集声点本の研究」資料篇

（校倉書房 昭和47）同索引篇（昭和49）
へ3 複製。及び、葉島裕「淨辨本拾遺和歌集所載のアクセントに就いて」『国語アクセント論叢』昭和26、所収。

へ4 「平安かなづかい」について、「佐伯梅友博士古稀記念国語学論集」昭和44。

五 結び

梅沢本『古本説話集』の仮名遣の実態を、八行転呼音、フア行音の表記をめぐる事象に限つて調査し、

歴史的仮名遣から見ての違例を報告し、簡略な分析を試みてきた。（開合、四つ仮名の違例は存しない。）これらがこの資料の仮名遣の問題点の中核であるが、他にも字音表記、撥音表記（助動詞「む」の類をも含む「むん」無表記）なども採り上げらるべきである。字音の一部に僅か触れたところがあるが、後日の追補により全体のまとめを行いたい。

「お」を「」について比率を計算したところで述べたごとく、全体として定家仮名遣の方向に添うかのごとくでありながら、一致しないものが相当多い。為氏、為相、阿仏尼などがその真筆においていかなる仮名遣を持っていたかを確かの上で、梅沢本の仮名遣とそれらの關係について述べようのであるが、梅沢本四筆のいづれにも、定家仮名遣を特に修得し守ろうとする様相は見受けられず、むしろ、当時一般の慣習的表記法に則つて記されていると思われる。四筆も統一的な仮名遣でなく、語によつては相反する表記をとる場合も含みつつ、幅広い緩やかな表記法によつていられるようである。この点は他の類書との調査を併せて一層明らかにする筋のものである。